

されば、妙楽大師のたまわく「必ず心の固きに仮って、神の守り則ち強し」等云々。人の心かたければ、神のまぼり必ずつよしとこそ候え。

これは御ために申すぞ。古の御心ざし申すばかりなし。それよりも今一重強盛に御志あるべし。その時はいよいよ十羅刹女の御まぼりもつかるべしとおぼすべし。

(御書新版 1689 ページ・御書全集 1220 ページ)

通解

(法華經を信ずる者は諸天善神に守られる) それゆえ、妙楽大師は「心が堅固であれば、必ず神の守りも強いのである」と言われている。その人の信心が固ければ、諸天善神の守りは必ず強い、ということです。

これは、あなたのために申し上げるのである・これまでの、あなたの信心の深さは、言いがた。い表すことができない。しかし、それよりもなお一層の強盛な信心に励んでいきなさい。その時は、ますます十羅刹女の守護も強くなると思いなさい。

今日より明日へ 挑戦の日々を！

よくわかる解説

皆さんこんにちは、レオです！ 寒い日が続くけど、今月も御書を学んで、充実の日々を送ろう！

今回学ぶ「乙御前御消息」は、1275年（建治元年）、日蓮大聖人が54歳の時に身延で著され、乙御前と、その母親に送られたお手紙です。

乙御前の母は鎌倉に住んでいた門下で、夫と離別し、幼い娘を育てながら純粋な信心を貫きました。

1271年（文永8年）、大聖人が佐渡に流罪され、鎌倉の門下たちにも権力からの弾圧が加えられると、多くの門下が大聖人を裏切って退転しました。そんな中でも、乙御前の母は信心を貫き、鎌倉から佐渡の大聖人のもとを訪ねています。大聖人は、その求道の心を称賛され、乙御前の母に「日妙聖人」という最高の称号を贈られました。

御文の中で大聖人は、信心を貫き、広布への決意が固い人には、その人を守る働きである諸天善神の守護が必ず現れ、どんな苦難にも打ち勝っているといわれています。

続く御文では、乙御前の母が、より一層の信心に立つための極意を示されます。これまでの求道の姿を心から称賛し、その上で「これまで以上に強盛な信心を貫いていきなさい」と述べられているのは、信心において一番大切な「昨日より今日」「今日より明日へ」という姿勢を教えられるためと拝されます。

私たちも、勉強や部活動などでモチベーションが上がらず、頑張れない時があるよね。そんな時は、勤行・唱題に挑戦して、自分の心と向き合うことが大事なんだ。そして、「もっと成長しよう」と決意し、挑戦を続ける中で、必ず成長した自分自身になることができるよ。

池田先生は「何があってもたゆむことなく、むしろことあるごとに、いよいよ強盛の信心を奮い起こして、わが生命を錬磨していくことです」と語っています。

信心根本に「今日より明日へ」と心を燃やして、大きく飛翔していこう！